

推薦のことば

この度、骨・軟部の X 線検査や MRI, 核医学の現場に長年関わり、診療放射線技師の指導にも当たってこられた方々が、医師、特に整形外科医との医療連携を通して培ってこられた経験を基に『診療放射線技師読影ノート 骨軟部編』を出版されました。

本書の構成は読影の基礎として、骨折の発生機序、X 線画像の読影方法、CT 検査、MRI 検査、核医学検査、DR・IVR 検査、AO 分類、臨床事例として、外傷、スポーツ障害、退行性疾患、小児股関節、感染症、先天性・代謝性・壊死性疾患、腫瘍・腫瘍類似疾患、WARNING 疾患、Don't Touch Lesion、そして 14 の読影問題・解説となっています。いずれの事例も診療放射線技師が必要とする臨床基礎知識、検査・読影ポイント、各モダリティの X 線画像が判りやすく説明されています。

私が専門としているスポーツ整形外科や整形外科の分野で、我々が診療放射線技師に求めることは、当然、「再現性の良い診断能の高い X 線画像の提供」であります。そのような視点から本書を見てみると国内外の整形外科学会等で使用されている Stage 分類、Type 分類も解説に引用され、整形外科医がどのような判断基準で手術をするのかも判りやすく説明されています。医療機関においては「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進」が重要と考えられており、整形外科医に患者さんの情報を伝えるために必要不可欠な内容が網羅されている本書は、診療放射線技師にとって日常の業務に有益な書物であります。

画像診断分野における放射線関連機器の進歩は日進月歩であります。単純 X 線撮影装置のデジタル化、X 線 CT 装置の多列化、MRI 装置の高磁場化は画像診断情報量のレベルを飛躍的に向上させました。特に、X 線 CT 装置による 3 次元の骨・軟部画像は、整形外科医にとっては不可欠な画像になりつつあります。整形外科医が求める X 線画像を作成するには、作り手である診療放射線技師の知識や経験が大変重要であり、その X 線画像は、読影のできる優秀な診療放射線技師によって作成されるべきだと考えています。

最新の放射線画像に関する知識を日常診療に使いやすくまとめた本書はこのような背景から「読影のできる診療放射線技師を育成する」ために生まれた本ではありますが、診療放射線技師だけでなく、臨床研修医や看護師・理学療法士など多くの医療スタッフ、あるいは経験を積んだ整形外科医が読まれても十分にその素晴らしさを実感できる内容となっております。

日々の臨床の場で、頻用していただくに足る内容の本書を是非、手元に置いて活用していただきたく推薦いたします。

2014 年 8 月 吉日

昭和大学藤が丘リハビリテーション病院

スポーツ整形外科

教授 筒井 廣明